SHOW-HEYシネマルーム

★★★★★

ザ・ホエール

2022年／アメリカ映画
配給：キノフィルムズ／117分

2023（令和5）年4月15日鑑賞	TOHOシネマズ西宮OS

Data　２０２３－４６

監督：ダーレン・アロノフスキー
原案・脚本：サミュエル・D・ハンター
出演：ブレンダン・フレイザー／セイディー・シンク／ホン・チャウ／タイ・シンプキンス／サマンサ・モートン

みどころ

あなたは昔のプロ野球球団“大洋ホエールズ”を知ってる？それを持ち出すまでもなく、“ホエール”とは鯨のこと。アカデミー主演男優賞を受賞したブレンダン・フレイザー演じる体重２７２ｋｇの中年男の姿を見れば、そのタイトルにも納得！他方、あなたはメルヴィルの小説『白鯨』を知ってる？

この男は、なぜ過食症になったの？その心の傷は、なぜ癒えなかったの？舞台劇を映画化した本作は５人の男女の会話劇だが、韓国のホン・サンス監督による数々の軽妙かつおしゃれな会話劇とは大違いだ。『白鯨』絡みの会話はもとより、宗教（聖書）絡みの会話もチョー難解！

その上、パンフレットにあるコラムもレビューもクソ難しいから、本作の理解にはよほどの覚悟と勉強で臨まなければ！

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

■□■ヴェネチアでも、アカデミーでも、主演男優賞を！■□■

本作の主人公は、体重２７２ｋｇの中年男チャーリー（ブレンダン・フレイザー）。彼は今、大学のオンライン文章講座で生計を立てているらしい。巨体に劣等感を抱いている彼はウェブカメラをオフにして学生たちと対話していたが、すべての観客は冒頭のシーンで目にするその巨体にビックリ！（巨大な）歩行器に頼らなければ歩くことすらできないのだから、身体をかがめて物を拾うこともできない。したがって、不注意で携帯やリモコンを落としたりすると大変だ。これでは常に“要介護状態”であることは明らかだが、どうやらチャーリーは大きな家で一人住まいをしているらしい。

そんなチャーリー役を演じた俳優ブレンダン・フレイザーは『ハムナプトラ／失われた砂漠の都』（９８年）で主演を務め、続く『ハムナプトラ２／黄金のピラミッド』（０１年）、『ハムナプトラ３／呪われた皇帝の秘宝』（０８年）（『シネマ２１』４８頁）にも出演した

が、その後、心身のバランスを崩して長らく表舞台から遠ざかっていたらしい。そんな彼のカムバック作になったのが本作だが、２０１２年１１月に本作の原案となる舞台を見て感動したダーレン・アロノフスキー監督がその戯曲の映画化を目指す中、主役として手繰り寄せたのが彼だ。ダーレン・アロノフスキー監督は『レスラー』（０８年）（『シネマ２２』８３頁）で第６５回ヴェネチア国際映画祭金獅子賞を受賞し、『ブラック・スワン』（１０年）（『シネマ２６』２２頁）でナタリー・ポートマンにアカデミー賞主演女優賞をもたらした名監督だが、なぜ彼はブレンダン・フレイザーを本作の主役に？それは、本作をラストまで観ればハッキリ分かるはずだ。

普通の体形の俳優ブレンダン・フレイザーが毎日４時間もかけて特殊メイクを施し撮影に臨むのは大変だったはずだが、そんな苦労の甲斐あって、ブレンダン・フレイザーは第７９回ヴェネチア国際映画祭で見事主演男優賞をゲット！さらに、第９５回アカデミー賞では、ノミネートされていた主演男優賞を受賞した。主演男優賞は、『エルヴィス』（２２年）（『シネマ５１』２６頁）のオースティン・バトラー、『イニシェリン島の精霊』のコリン・ファレル、『aftersun／アフターサン』のポール・メスカル、『生きる LIVING』のビル・ナイを押しのけての受賞だからすごい。本作では、とにかくこのブレンダン・フレイザーが演じる体重２７２キロ男、チャーリーに注目！

■□■なぜこのタイトルに？有名小説『白鯨』との関連は？■□■

世界文学全集のほとんどを小学生の時に読破した私は、メルヴィルの小説『白鯨』（１８５１年）を読み終えた時の感動をよく覚えている。グレゴリー・ペック主演の映画『白鯨』（５６年）を観た時の感動も同じだ。本作のタイトル『ザ・ホエール』とはクジラのこと。ちなみに、現在のプロ野球球団、横浜 DeNA ベイスターズのかつての球団名は大洋ホエールズだった。私が小学校４・５年生の時の１９６０年、三原脩監督の下、下手投げのエース秋山登が大奮闘して前年の最下位から一転してリーグ優勝し、さらに日本一になったのは「三原マジック」として今でも語り草になっている。しかして、本作のタイトルはなぜ『ザ・ホエール』に？

それは、冒頭に見る、まるでホエール＝クジラのようなチャーリーの巨体にちなんだもの！たしかにそれは間違っていないが、このタイトルには、もっともっと深い意味があるらしい。それは、メルヴィルが１８５１年に発表した有名な小説『白鯨』との関連だ。あなたは、この小説の主人公であるエイハブや語り手のイシュメイル、そしてモービィ・ディックと名付けられた白鯨とエイハブとの深い深い因縁、さらに、ラストに訪れるエイハブの悲劇と捕鯨船ピークォド号を襲う悲劇を知っている？もし、それを知らなければ、残念ながら本作の面白さと理解度は半減してしまうはずだ。

本作はチャーリーの月曜日から金曜日までの５日間を描く密室劇（舞台劇）だが、冒頭、発作による激痛に苦しむチャーリーの姿が描かれる。こんなひどい症状なら入院が必要だが、頑なにそれを拒むチャーリーがそこで求めるのは、“あるエッセイ”を朗読してもらう

こと。下手な薬を飲むことよりも、それを朗読してもらうことの方が効き目があるらしい。現に、その朗読を聞いているうちにチャーリーの発作は治まったから、アレレ・・・。こりゃ一体なぜ？さらに、本作ではチャーリーの娘である、第８学年（日本なら中２）のエリーが授業の課題として書いた、メルヴィルの『白鯨』に関するエッセイ（作文）が大きなポイントになるので、それにも注目！

そんなストーリー（密室劇）を見ていると、『ザ・ホエール』というタイトルの本作が提示する、極めて難解なテーマは、メルヴィルの『白鯨』と深い関連があることがよくわかる。そうすると、あらためて本作の鑑賞には同小説の読破が不可欠だ！

■□■チャーリーを訪れる４人の男女と濃密な会話劇に注目！■□■

「日曜日は市場へ出かけ　糸と麻を買ってきた」から始まるロシア民謡の「一週間」は、陽気で楽しい日曜日から土曜日までの１週間を歌っていたが、チャーリーの“最期の５日間”となる月曜日から金曜日までは、チャーリーと彼の家を訪れる４人の男女との濃密な会話劇となる。韓国のホン・サンス監督の作品は会話劇で有名だが、そこでは“軽妙さ”が特徴だ。それに対して、本作の会話劇は徹頭徹尾“濃密”だから、しんどいと言えばしんどいが、見応え十分。

チャーリーの家を訪れてくるのは、①チャーリーの唯一の友人である看護師のリズ（ホン・チャウ）、②ニューライフ協会の宣教師トーマス（タイ・シンプキンス）、③長らく疎遠だった１７歳の娘エリー（セイディー・シンク）、④チャーリーの元妻メアリー（サマンサ・モートン）の４人。日本人の多くはキリスト教や聖書に疎いから、本作に見る“ニューライフ教会”という新興宗教が一体何を説いているのか知らないはずだ。本作のモデルとなったサミュエル・D・ハンターの舞台劇では、これはモルモン教だったそうだが、ニューライフ教会であろうとモルモン教であろうと、日本人には、その教えが如何なるものかわからないのは同じだ。したがって、ニューライフ教会の布教のためにはじめてチャーリーの家にやってきたトーマスを、チャーリーの看護をしているリズが、なぜあんな風にピシャリと拒絶するのかもよくわからないだろう。

しかし、①本作では名前だけしか登場しないリズの兄であったアランとチャーリーがかつて“同性愛”の関係にあったこと、②アランもリズもかつてニューライフ協会の信者だったが、今は離れていること、③ある事情でアランが死んでしまったこと、④そのショックでチャーリーは“過食症”になり、現在に至っていること、がわかってくると、ニューライフ教会の教えがチャーリーやリズの人間形成に及ぼした影響の良い面と悪い面がいろいろと見えてくる。その影響をもろに受けたのは妻のメアリーであり、一人娘のエリーだったが、リズから今の血圧は２３８／１３４、うっ血性心不全でいつ命を落としてもおかしくない数値だと告げられた月曜日以降、チャーリーはいかなる行動を？

■□■セリフも難解！コラムも難解！あなたならどう挑戦？■□■

私はメルヴィルの小説『白鯨』を面白く読み、映画『白鯨』を興味深く鑑賞した。しか

し、ハイティーンの女の子エリーには、この小説はイマイチで、少し退屈だったらしい。そんな思い（感想）を綴ったエッセイ（作文）を授業の課題として提出するのはいかがなもの、と私は思うのだが、案の定、それに対する先生の評価は厳しく「不可」とされたらしい。その結果、久しぶりに実現した父娘の“ご対面”の中、そのエッセイの修正を巡って、チャーリーは真剣かつ有意義な時間を過ごしたが、エリーの方は・・・？

他方、トーマスの布教活動は通り一遍のものだった（？）から、彼の言葉はチャーリーに対してまるで響かなかったし、リズからは反発を買うだけのものだった。しかし意外にも、トーマスがエリーに出会った木曜日には、エリーから勧められた大麻を通じて思いがけない身の上話をするなど、トーマスが意外な本性をさらけ出していく中、奇妙な信頼関係が生まれていくことに・・・。

もっとも、チャーリーを含めて総勢５人による代わる代わるの会話劇で構成される本作の会話は、白鯨に関するものも、聖書に関するものも、とにかく難解。とりわけ、日本人の私たちには難しい。そんな時に、頼りになるのが、パンフレットだ。本作のパンフレットには、ブレンダン・フレイザーのインタビューや、ダーレン・アロノフスキー監督のインタビューの他、①高橋諭治氏のレビュー「妥協なき描写で人間の本質に迫るダーレン・アロノフスキーの真骨頂」、②春日武彦氏のコラム「溺れている鯨を見つめる」、③堀内正規氏のレビュー「『ザ・ホエール』と「白鯨」の間　――または神なき体のひとときのかがやき」の３本がある。しかし、これらのレビューもコラムもすべて難解。私は一生懸命これらを読んだが、多分半分も理解できていないだろう。本作はセリフも難解なら、コラムもレビューも難解！さあ、あなたならどう挑戦？

■□■“肉体論３部作”で３打数２本塁打！■□■

キネマ旬報４月下旬特別号は、５０～５７頁で『ザ・ホエール』を特集している。そこにある、誰にでもわかる興味深いレビューが、秋本鉄次氏の「アロノフスキー“肉体論３部作”の掉尾を飾ったのは、“超肥満体”演技でオスカー奪取の“再生”フレイザー！」だ。①『レスラー』（０８年）、②『ブラック・スワン』（１０年）、そして③本作を“肉体論３部作”と表現するのは、まさに秋本氏ならではの才能。同レビューの冒頭には、「“俳優の生身の肉体とその履歴こそ映画の醍醐味”を掲げてン十年の私のストライクど真ん中、我が意を得たり、の新作がコレ！強引に纏めれば、ご贔屓監督ダーレン・アロノフスキーによる『レスラー』（０８）、『ブラック・スワン』（１０）に続く“肉体論３部作”の掉尾を飾る一本と断じたい。」と書かれている。なるほど、なるほど。続いて、「３つ目のトドメに、アロやん（勝手に監督への愛称）、こう来たか、さすがだね！と感服してしまった。」と彼特有の褒め方をしているが、さてアロやんはこれをどう受け止める？

さらに、彼はブレンダン・フレイザーがアカデミー主演男優賞を受賞したことについて、「『ブラック・スワン』のナタリー・ポートマンに続いて、肉体論３部作で２人のオスカー俳優を送り出すとは“３打数２本塁打”のようなアロノフスキー。」と表現しているが、こ

れも、なるほど、なるほど。　　２０２３（令和５）年４月２０日記